

令和 3年 8月 5日

## 若手研究者海外挑戦プログラム報告書

独立行政法人日本学術振興会 理事長 殿

受付番号 201980044

氏名 堀内 彩虫

(氏名は必ず自署すること)

若手研究者海外挑戦プログラムによる派遣を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。  
なお、下記記載の内容については相違ありません。

### 記

- 1 派遣先: 都市名 バークレー (国名 米国)
- 2 研究課題名 (和文) : 他者の歌声の聴取に関する現象学的研究: 知覚と行為の関係という観点から
- 3 派遣期間: 令和元年 8月 1日 ~ 令和2年 3月 25日 (238日間)
- 4 受入機関名・部局名: University of California, Berkeley, Department of Philosophy

#### 5 派遣先で従事した研究内容と研究状況 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

本研究の目的は、他者の歌声を聴く行為が聴く主体にとっていかに経験されるかを現象学的に分析し、エナクティヴィズムの観点から聴取理論としてまとめることである。本研究では、同じ歌声を聴いても身体的違和感が聴き手によって現れたり現れなかったりする現象、あるいはその現れ方が聴き手によって異なる現象に着目し、どう聴こえるか (知覚) ということと、どう／何をもって聴くか (行為) というものの関係性について知覚理論エナクティブ・アプローチとを用い分析した。特に、歌う経験が豊富な主体が他者の歌声に対して一般的な聴き手が感じない身体的感覚を感じるとる事例に焦点を絞り、その背景に聴き手が聴く対象を「探索」するための身体的技能があることを指摘した上で、エナクティブ・アプローチを用いて知覚における行為の介在を説明する理論の構築を目指した。

派遣先では、エナクティブ・アプローチの提唱者であるアルヴァ・ノエ氏の下で研究を進めた。ノエ氏のエナクティブ理論を歌声の聴覚現象に適用し、身体的違和感の個人差の成立を論証することに対し、ノエ氏から直接的な指導を受けた。研究計画の段階では2020年7月末日までの米国滞在を予定していたが、新型コロナウイルス感染拡大の影響により2020年3月に大学が完全に閉鎖され、再開の見込みがないことを受けて、一旦計画を中断し、2020年3月に帰国した。しかし、カリフォルニア大学バークレー校における客員研究員としての在籍期間は7月末日までであったことから、受入研究者の提案により、オンラインで授業、ゼミ、ミーティング、研究会等に参加し、7月までの研究員期間を全うすることができた。所属大学のオンライン移行の対応が大変迅速で、研究環境のみならず事務処理や各種交流イベントも含めた全てが円滑にオンラインに移行したため、不便を感じることなく、米国滞在時の研究環境を遠隔でも得ることができた。資料へのアクセスに困難はあったものの、渡航前に計画していた研究内容は遂行することができた。

6 研究成果発表等の見通し及び今後の研究計画の方向性 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

米国滞在中に行われた主な研究成果として、2019年11月に開催された日本音楽知覚認知学会におけるポスター発表および所属先のカリフォルニア大学哲学部研究発表会における発表が挙げられる。また、受け入れ研究者が主宰する学外研究会における研究発表およびディスカッションの機会も得た。本研究に直接関わる帰国後の成果発表として、2021年9月に開催される国際美学会の第8回地中海大会における研究発表(2020年開催予定だったが1年延期)が予定されている他、英語での投稿論文を執筆している。本研究の成果の多くは、音楽における他者の声の聴取においてどのような知覚内容を獲得するかは知覚者がどのような身体知を所有・使用するかに依存することを理論的に説明するものとして博士論文に反映される。

これまでの研究では、聴き手が他者の歌声に対して身体的違和感を知覚するという現象の成立条件を解明してきたが、今後の研究では、こうした現象がどのように起こっているのかを解明するため、現象そのものの過程をより詳しく分析する予定である。そのために、実際に現象が起こる瞬間とその前後を含めた一連の様子を正確に捉え、その細部を研究者自身が観察することをめざす。その際、声の聴取の一連の行為をビデオに記録し、行為分析の手法を用いて映像を分析する研究方法を新たにとり入れる。今回の米国滞在中で得られたエナクティブ・アプローチの適用とフィールドワークに基づくデータとを組み合わせることで、主体の感覚的経験を重視しながらも、豊富な事例で現象の普遍性を示し、考察結果をデータで裏付けて実証性を確保できると考えている。研究手法は多少変わるが、今後も一貫して聴き手自身の発声する身体と聴取する身体との交錯という観点から声の現象を考察していく。

7 本プログラムに採用されたことで得られたこと (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

本プログラム採用中に、今後の研究や研究上の国際交流に影響を及ぼす多くの刺激的な出来事があった。

まず、受入研究者のノエ氏が月2回か3回の頻度で定期的に行っていた学外研究会に参加できたことが挙げられる。所属大学やスタンフォード大学から哲学および美学研究者が10名ほど集まって開催される2時間程度の研究会で、毎回1名の研究者が話題提供を行い、それについて質疑応答およびディスカッションを行うというものだった。私も話題提供者を一度担当した。はじめに話題提供者が30分間程度のプレゼンテーションを行い、残りの1時間半を質疑とディスカッションの時間に充てる。話題提供者は事前にまとまった量のペーパーを書いて参加者に共有し、参加者は当日までにそれを読んで議論に備える流れだったため、参加者からの質問や全体での議論の質が高いことに驚いた。それまでも国際学会や国際セミナーでの発表経験は何度もあったが、1時間半ものあいだ次々に降ってくる質問に答え、自分が中心になって英語で議論をまわすのは初めてであり、大変よい経験になった。

次に、派遣先のカリフォルニア大学バークレー校における客員研究員向けのプログラムの充実を挙げておきたい。当該校は毎年多くの客員研究員を受け入れていることから、客員研究員のための英語コース、英語によるFDプログラム、国際交流会などがほぼ毎日のように用意されており、その多くは無料で参加できる。日中は研究を中心に過ごし、夕方以降はそうしたプログラムや交流会に頻繁に参加することができた。そのなかでも英語を第二言語とする客員研究員に向けた英語学習コースは大変充実しており、英語での論文執筆をするためのレクチャーや英語で授業を行うための実践を交えたクラスはとても勉強になった。こちらのプログラムを通じて、近い分野の研究者の知り合いが増えて今も連絡を取り合っており、言語交流のパートナーとなった人とは今もなおオンラインで月2回程度、各1時間、英語で情報交換をしている。

最後に、滞在中、自分の分野を牽引する研究者と知り合えたことを挙げたい。ヴォイス・スタディーズ研究で注目されている米国の研究者が私の滞在中にバークレー校に招待され、講演を行った。講演後に私から声をかけて、彼女の論文を研究で引用していることや自分の研究との接点について話した。その後も、私の研究に関連する最新動向について情報を共有してくれるなど、メールで交流が続いている。この交流をきっかけに彼女の著書を翻訳することになり、彼女の仕事を日本に紹介する機会にも恵まれた。